



第 138 号 (2008)

〒733-0032 広島市西区東観音 8-10

ワールド・フレンドシップ・センター

理事長：森下弘 館長：ケント&サラ・スワイツァー

TEL (082) 503-3191

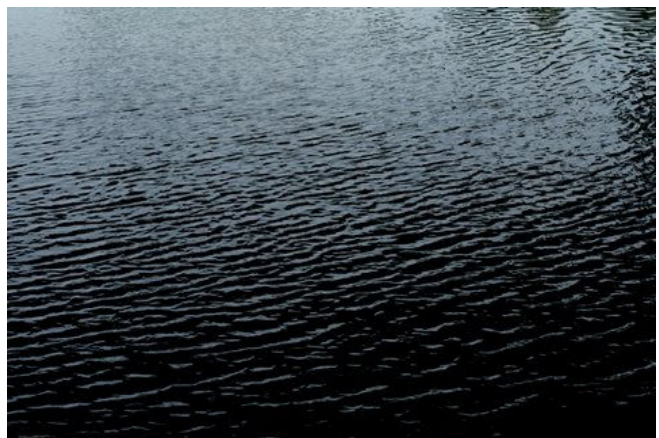
FAX (082) 503-3179

E-Mail: worldfriendshipcenter@gmail.com

URL: <http://www.wfchiroshima.net/>

この友愛特別号は、“波紋の影響”と題してワールド・フレンドシップ・センターの平和交換使節 (PAX) と修道大学インターンシップに的を絞り、加えて最近の WFC ボランティア体験もカバーしています。こうした機会が、互いにそして自分自身の中でより平和で理解しあえる世界を作りたいと願う我々個々の生き方に、どんな前向きな役割を果たすかを読み取って頂けます。

夕暮れ時、サラと私は天満川沿いのベンチに腰掛け水面に起こる“波紋の影響”をじっと眺めることがあります。ボートが通るとその後長い間、川岸を打って返した波は広くあちこち水面に波紋を広げていきます。ボートが見えなくなっただけからやって来る者にとっては、尚も続いている波を起こしたものがいったい何であったのか、ただ想像するのみです。哲学者、経済学者、物理学者、歴史学者、芸術家たちは、インスピレーションから物理現象に至るまで、“原因と結果”の間接的な因果関係を表現するのに“波及効果”という喩えを用いることがあるのです。



多くの場合、WFC に関わるようになった人たちとセンターとの縁は、それまでの人生経験、過去の出来事や昔の、或いはつい昨日のことからの“波紋”の広がりによる繋がりなのです。今号友愛が展開する通り、相互に関わりあい、積み重なって更に“波紋”を生み出していく話をいくつかここに紹介して WFC 広島の広がりゆくミッションを読者の皆さんと共有したいと思います。

私は日本に住んで約 20 年になります。その間平和に関連する報道や出版物には翻訳なども通じて関わってきましたが日本や日本人の立場に立った見方からでした。しかし最近に

なって、広島で行われた韓国人主催のある集会に参加して、こう考えるようになりました。物事について考えたり読んだり聞いたりすることは「頭の中だけの知識」を増やすことはできるが、しかもそれもふるいにかけてある意味偏っている可能性の情報によって、自分は正しく他者はまちがっているという偏見を固めてしまうだけではないかと気づきました。平和に向かって私たちの態度を変えることは自分の信条や偏見に真っ向から立ち向かい、私たちの行いを改めてゆかなければならないのです。人を赦し、謝罪し、私たち自身が赦すことを目の前で体験してゆかなければならないのです。私はこのことを一人の人間として、教師として父として夫として感じてきました。人との関わりにおいてこのお互いを交換する体験から多くのことを学び他の人にとっても大切なことだと感じています。

一人の個人にいったい何ができるのでしょうか。私たちが自分の人生により影響を与えた人物のことを考えるとき、一人でも何かできるということを考えることができます。私たちは人とどのように関わるか意思を持って選んでいます。傷つけるか、あやまるか、親しみやすさをもつて接するのか。どれを選んでもお金はかかりませんが、しかし自分が正しいと思ってやったことも自由を行使するという強いメッセージを送っています。しかもめっ面か、笑顔か、顔の表情一つとっても一人の個人として自分のまわりの世界をよい方向にも悪いようにも変える何かができることをあらわしています。このことによってまた他にも多くの方法でも一人個人ができることがあるのです。

私は広島に来るまでは平和に関する活動に参加したことはありませんでしたが、この20年間、広島で三つの活動に関わるようになって何らかの形で平和に向けてできることがあるのではないかと考えています。

一つは原爆関連の出版物の翻訳監修です。被爆者の体験記やヒロシマを体験するガイドなど、広島YMCAとヒロシマ平和のための通訳者グループ(HIP)を通して関わってきました。二つめはアムネスティインターナショナルの活動に参加し、世界で不当に拷問を受けたり投獄されたり非人道的な扱いを受けている人々の人権支援、保護、回復を訴える活動にかかわってきました。三つめは小さい聖書の勉強会を行ってきたことです。クリスチャンの人もそうでない人も国籍の違う人も、「平和の君」から学び、愛する、赦すとは何かを理解しようと学んでいます。聖書を読み、お互いに話し合うことによってそれぞれの立場や状況は違っても理解し違いを認め、赦すことは痛みをとまなうこと、信仰にたって前に進んでゆくことを学んできました。

昨年、WFC でのアムネステイインターナショナルのミーティング後、修道大学、英語教授で上記の記事を書いたジム・ロナルド氏と私は、WFC と修道大学とのインターンシップの可能性について話し始めました。そうした話し合いから 80 時間強の初のインターンシップが田丸和枝さん、島村康代さんで実現し、二人は WFC の英会話生徒や理事たちともども様々なことを集中的に学びました。このインターンシップ以前



はお互い知り合いでもなかった二人ですが、興味を共有し WFC でその歴史、伝統そして現在の課題を多くの人から学びました。WFC 理事会において二人はそのインターン体験を報告し、10月25日には修道大学の報告会で発表しました。田丸和枝さんは、韓国 PAX 2008の一員として自己紹介とその体験を、WFC での経験が自分の生活の中で新たな“波紋”を作り出し始めた、と次のように書いています。

[写真：ケント・スウィツァーと、修道大学-WFCインターンシップ学生の康代と和枝]

私の名前は田丸和枝といます。21 歳になります。私は幼少の頃から広島に住んでいます。現在、広島修道大学の 3 回生です。9 月からワールド・フレンドシップ・センターでインターンシップを受けます。法学部国際政治学科で、主に平和学を勉強しています。

私が平和学について関心を持った理由は、幼い時から平和というものについて考える機会があったからです。私の祖母は広島で原爆にあった被爆者であり、祖母の被爆体験を何度も聞いてきました。涙ながらに祖母は被爆体験を語ってくれます。さらに、小学校、中学校でも平和について学習しました。そのため子供の頃から、平和について関心を持ってきました。

私が韓国 PAX に参加しようと思った理由は、2 つあります。

まず一つ目に、日韓の歴史についてもっと学びたいと思ったからです。大学で学んだ 3 年間で、世界の歴史や戦争、世界情勢などについて勉強しました。韓国についても勉強しました。私は第二次世界大戦中に日本の行った、負の側面を知り、とてもショックを受けました。

二つ目に、韓国という国を知りたかったからです。私の友達の中にも在日韓国人であったり、韓国人とのハーフだという子がいます。広島には朝鮮高校もあります。もし、韓国の文化などをもっと理解できたら、より彼らと仲良くできると思います。

私の夢は教師になることです。もしその夢がかなったら、生徒たちに歴史の真実を伝えていきたいです。有名な小説家の一人、ジョージ・サンタヤナが言っています、「過去を忘れる者はそれを繰り返すよう運命付けられている」と。私は戦争の体験はありません、しかし戦争を繰り返さないためにも過去を伝えていきたいと思います。

同じく韓国PAX2008に参加した修道大学学生、李順姫さんは次のように記しています。彼女は修道大学で英語を専攻している在日韓国人学生です。

今回、Korean PAX programに参加したい理由は、平和についてもっと学びたく、韓国と日本の相互理解と友情に貢献したいからです。私は、韓国と日本の間の歴史と平和都市である広島で、原爆と平和について学んできました。今回のPAX programによ



って、日韓の歴史を再度学びたく、もっと知ることができると思っています。また、韓国で歴史を学ぶことで、今までとは違った視点から、歴史、平和について考えることができると思い、参加を希望します。

これから、日韓の平和のために一人ひとりにできると思うことは、歴史、過去を知ることだと思います。過去を知ること、未来に活かすことができると思います。私が学んできた日韓の間の歴史や日本で起きた原爆の歴史は、とても悲惨です。そうした過去の過ちを二度と繰り返さないことを学ぶのです。一人ひとりが、歴史に関心を持つことが大事だと思います。歴史を知ること、視野が広くなり、物事を見る視点が変わり、歴史を知った上での交流、関係はもっと深いものになると思います。歴史を見つめ、お互いを理解し合い、尊重することが、日韓友好の絆を築くために大切なことだと思います。また、自分が興味を持ち、相手にも興味を持ってもらえれば、友好的な関係が築きやすいと思います。私自身もっと日韓の歴史について学び、知識を深めていこうと思います。

**【写真上：1列目左から：千鶴子さん、関口先生、順姫さん、和枝さん
2列目左から：祥さん、寿子さん、亜耶さん、ジム・ロナルド】**

修道大学から4人目の韓国 PAX2008 参加者は、**植村祥さん**で、法学部国際政治学科4年生。
下記の文章は彼女の応募時のエッセイです。

今回、私がこの韓国への平和交換使節 PAX に参加したい理由は、広島的大学生としてできることを精一杯頑張りたいと思っているからです。私は、県外から広島に大学進学のため出てきました。今まで一生懸命、自分にできる国際貢献を探し、取り組んできました。これまでは、アイセックという学生だけで運営している NPO のメンバーとして活動してきました。この団体では、「平和、そして人間の可能性を最大限に発揮できる社会の実現」を VISION に掲げています。活動内容は、学生の海外インターンシップをコーディネートし、インターンシップに関わる企業や学生、若者、地域社会の人材育成です。この団体に参加することで、自分自身が成長し、また他の若者も成長してゆく。そして、そんな若者たちを中心に世界を良くしてゆく。そういった充実感を感じながらの活動でした。

また、平和に関するイベントにも参加してきました。8月6日に平和ドームの周りに、キャンドルを灯し、平和を祈る「ピースキャンドル」の運営スタッフや市民講座として行われている「平和サミット」などです。今回、エッセイのテーマにもなっている『一人ひとりにできると思うこと』。それは、一人ひとりのやる気と向上心、自分の平和観を持ち、活動や勉強、仕事をすることだと思えます。そして、様々な立場の人、考えを持つ人との対話を持ち、実行に移すことが大事です。私自身、日頃からその考えを初心に置き、取り組んでいます。

この PAX で、平和都市広島の学生として、自分が現場に立ち世界に何ができるのか、何をしたいと感じ、熱くなるのかを考え直したいです。また、日韓の国際関係に興味があります。停戦ラインの38度線、靖国神社、竹島問題などです。韓国の人々が、何を考え、何を感じているのかを、自分の目、耳で確かめたいです。受け入れたいです。そして、私が日本人として、大学生として、広島人として何を想っているのかを伝えたいです。

このたびの韓国 PAX2008 のメンバーには、長い歴史をもつ WFC と今までの PAX プログラムに深くかかわってきた3名が含まれていました。波紋が長期間に及んでいることを彼らの手記は示しています。

河野寿子さんは、「新しい時代の始まり」という題のエッセイを書いています。

先日、友人から彼女の息子さんの結婚披露宴の写真をみせてもらいました。背が高くたくましい花婿の横には、スマートでチャーミングな花嫁がウエディングドレスから沢山の刺繍で彩られた真紅のチマチョゴリに着替えて席に着いている様子が写し出されていました。友人が話すには、「彼女はこのチマチョゴリが一番よく似合うのよ。花嫁が花婿より3つ年

上というのは私たち夫婦と同じなので、二人はきつとうまくいくと思うのよ。」とほほえみながら確信に満ちた様子でした。聞くところによると、花嫁の祖父母が日本に来て、両親は日本国籍を取り日本名に改名したらしく、彼女は在日三世だそうです。

時の流れは確実に変化していると思います。昔、日本は政治、経済、文化、宗教などの師として中国や韓国を見習っていた時代がありました。広島県にも、その昔、朝鮮からの使節団をたいそうもてなした歴史の記録が観光スポットになっている島があります。近年、日本の国策のために両国間の戦争があり、お互いの国民どうしに拒否感が生じたのはとても悲しい時代でした。

しかし、今再び新しい日韓関係が親密さを増してきている事はすばらしい時代のはじまりだと確信しています。最近では、日本のテレビで、韓国人歌手や韓国ドラマを見たりするのは当たり前の事となってきています。人対人の友人関係を深め、それを広げていけばきっと大きな力となって平和の礎となるでしょう。

私も今回のPAXに参加出来れば、韓国の人々との友情をより一層深めていこうと決意しています。

関口良雄さんは長崎の出身で、1982年にPAXメンバーとして合衆国を訪問しました。日本の子供達が朝鮮の子供たちをいじめているのを黙ってみていた事に今でも気がとがめていると書いています。彼は韓国へ行きその時に自分に勇気がなかったことを個人的に謝りたいと思いました。彼は次のように話しています。

こんにちは。韓国に来て直接皆さんに会って太平洋戦争中とその後のあの恐ろしい体験をお話できる事を嬉しく思います。戦争の原因を調べ日本が再び同じ残虐行為を決して繰り返さない事を確認しましょう。

今後は、日本人が何も悪い事はしていないし、与えられた命令に従わざるを得なかったと言ってもその責任を取らなければならないことを私は日本の人々に納得させます。人々は常に事実には無知であるが故に責任を取ろうとしなかったのです。

私の使命はとても難しいと思いますが、神が現世の力の上にあるもっと高い威光に従うよう私に求められているので、私がやらなければなりません。私たちが従うべき真の道は、内なる声すなわち良心により私たちが神に真剣に頼む時のみ与えられるのです。

私は弱いけれどもあなた方の暖かい友情に励まされるものと思います。皆様にお目にかか

るのを楽しみにしていますし、私たちの未来を充実させ約束し可能にする手助けをしたい
と思います。皆に神のご加護がありますように。愛と敬意をこめて。長崎の関口良雄より。

田口千鶴子さんの手記には、韓国の人々と、彼女の家族との歴史が綴られています。

私は、1943年に朝鮮で生まれた。父は1933年に21歳で朝鮮に渡り、母は隣村に住む親同士の協議で、1939年20歳の時、未だ見た事の無い朝鮮の父の元へ嫁ぎ、2歳上の姉と私を生んだ。

それは、国力の増強を計る日本政府が、300万の民間人を、中国、満州、台湾、朝鮮などの外地に送り出すことで、領土を拡大し、世界に日本の存在を示そうとする狙いから始まった出来事だった。

父は、13年間の現地生活で、主に中国と朝鮮との国境を流れる、鴨緑河沿いの警備に当り、5度転勤した。毎月、上司の巡回滞在があり、その夜は、同職の朝鮮の人の家族も一緒になって、酒宴の準備と接待に大わらわで、互いに、日本料理と朝鮮料理を教え合ったりして、大いに盛り上がったという。敗戦で、事態は一変し、一軒家の3部屋と玄関の間に、日本人の4家族15人が肩寄せ合って、帰国を待ち侘びながら1年以上暮らした。父は薪割りをして歩き、母は作った豆腐や所持品を売っては、何とか生計を立てた。2ヵ月後に帰国というある日、父が盲腸破裂から腹膜炎を起こし、近所の日本や朝鮮の人によって、戸板で病院に運ばれ、一命を取り留めた。帰国したら、再度手術を受けるようにと忠告を受け、1946年10月1日、ついに帰国の途についた。牛車、汽車を乗り継ぎ、3歳の私を背負い、5歳の姉の手を引いて、決死の覚悟で深夜38度線を越え、23日間かかって、ついに、佐世保に辿り着いたという。朝鮮の人々は皆親切で、食料を分け与えたり、最後まで良き隣人であり、本当に助けられたと、両親はその心根の優しさに、今も胸を詰まらせている。

かつて、18世紀半ば、ヨーロッパ列強が、次々に開国を迫ってアジアに侵入して来た。日本政府も遅れまいと、外交官吉田弘毅に、朝鮮開国の交渉に当らせた。その報告書によると“朝鮮の人心は篤く、信義を好み、堅く条理を守り、気質はアジアの国で最も美しい。”としていて、まさに両親の言った事と同じ感動を述べている。また、彼は、日本、朝鮮、中国は、連合してヨーロッパに対抗すべきであると説いた。その考えが取り上げられ、国の政策に真に生かされて来ていたら、アジアの平和と開発の歴史は、大きく変わっていた事であろう。

また、朝鮮では、日本の侵略により、400万人の人々が土地を奪われ、満州、日本、シベリア、中国へと流浪の生活を余儀なくされ、広島に生きる場所を求めて来た、5万人の人々は、

原爆という二重の憂き目に遭遇し、想像を絶する苦しみをなめる事になったのである。

韓国と平和使節交換が始まって 5 年間が過ぎ、継続して惜しめない親愛の情を示して戴いている。日本が大戦中に行った政策の貪欲さと戦後の対応を思うと、その懐の深さと平和実現への取り組みの真剣さに 日本人として恥じ入る思いがする。

この度、韓国を訪問する機会を与えて戴いた事を心より感謝したい。日本と韓国の歴史にじかに向き合い、共通の理解の上に立ち、より強い友情の絆を結べるよう、両親の願いも含めて勤めたいと思う。

長崎の高校生、**小野亜耶さん**の参加で、今回の韓国 PAX チームがさまざまな世代から成るバランスのとれたチームとなりました。

〔写真：千鶴子、亜耶、Keisen(ホストマザーの義母)〕



昨年私は、「イスラエル・パレスチナ・日本 平和のための子ども交流プロジェクト」というものに参加しました。このプロジェクトは、イスラエルとパレスチナの高校生に被爆という極限状態から平和への道を切り開いてきた長崎や、戦争の悲惨さと平和の尊さを学んでもらうと同時に、戦争や、真の平和を知らない日本の若者に、紛争の中で生まれ育ち、必死に希望の光を見いだそうとしている同世代の若者と触れあうことによって、痛みや苦しみに共感し、自分が平和のために何ができるかを考えてもらうというものです。初めのうちはイスラエルの高校生もパレスチナの高校生も、痛みを聞きあうための時間はもちろん、食事中やレクリエーションのときも見えない壁を作っていて、相手の話を聞かずに反発ばかりしていたのですが、二週間もすると「相手を許し歩み寄ることが平和への第一歩だ」と、答えを見だしてくれました。また私は、彼らの置かれている状況を、知っているつもりだったのですが、改めて本人の口から聞くと、あまりに幸せな生活をしていることに気づかされ、申し訳ない気持ちになり、涙が止まりませんでした。

私が通っている学校は、平和教育に熱心な先生が多く、中学生の頃から日本の加害、主に従軍慰安婦問題や 731 部隊、強制労働、虐殺など勉強してきました。現在、平和学習部という部活に所属しており、その活動の中で今でも日本のことを快く思っていない方がたくさんいること、中には、日本人のことも快く思っていない方もいること、未だに心に深い傷が残っているということを知り、いつか話し合っただけ今は昔と違うということ理解してもらいたいと思っていました。

イスラエルとパレスチナの高校生に、話し合いで明るい未来を作ることができることを教えてもらい、勇気ももらいました。もちろん、理解しあうことなど容易ではありませんし、もしかしたら、彼らのように、和解できないかもしれません。しかし、友達になることはできると思います。私はこの PAX を通して友好関係を築き、日韓の関係を少しでもよくできると確信しています。

韓国との PAX 交流を計画しはじめたころ、2007 年 8 月にアメリカからやってきた 4 人の PAX メンバーの一人、**メアリー・コックス**から WFC に E メールが届きました。彼女の、2007 年の日本への PAX の経験から続く「平和のさざなみ」で満たされた E メールをご紹介します。

「こんにちは、ケントさん、サラさん。これからも連絡を取り続けていきたいと思います。皆様が、何をなさっているか、WFC がどのような仕事をされているのか、とても興味があります。



この秋、私は MC の 4 年生になり、平和学の学位を取って卒業する予定です。この、大学の最終学年にわくわくして、学生として、平和と正義の問題に関わる、多くの計画を立てています。また、最近、私が、日本への旅について更に 2 回プレゼンテーションをしたことをご報告したいと思います。私が育ったカウンティでは、平和について、もっとも優れたエッセイを提出した 3 人の高校 3 年生に、平和奨学金を授与しています。数ヶ月前、私は、この奨学金の大会のゲスト・スピーカーとして招かれました。この奨学金を受ける人は、じきに大学へ入学しますので、私は、「大学での平和への取り組み」について話すことにしました。私は、マンチェスターに来て以来、私が関わってきた平和への取り組みのいくつかについて（その中の一つは、日本への旅でした）話し、スライドを映し、その細部について説明しました。そして、彼らが大学に進学した時には、平和への取り組みにおける、彼ら自身の方法を見つけるように激励しました。私は、実際何人かに、特に、学生達に、感銘を与えることができましたと思いますが、プレゼンテーションが済んでから、何人かの保護者が私に話しかけてきて、彼らは、感激で、もう少しで泣きそうな程でした。その人たちは、私の、励ましや、エネルギーや、平和への献身について受容力と理解があり、心から感謝してくれました。大学時代の経験を振り返り、熱心に取り組んできたことに気づくことができたので、この経験は、たいそう私の気持ちを高めてくれました。時には、自分の経験を誰かに要約して話すまで、気づかないものですね。

二回目の出来事は、先月行われた、ここ、ノースマンチェスターでの、国際ロータリークラブ地区大会です。この度のプレゼンテーションは、すべて、私の日本での経験についてお話をし、その後で、メンバーの幾人かと話しました。ある一人の女性は、私の話を聞くまでは、原爆や核の問題について、殆ど何も知らなかったけれども、これからもっと学習したいと言われましたので、どのように学習すればよいかについて、励まし、アドバイスしてあげました。もう一人の婦人は、私が平和学を専攻する学生だと知って、彼女の、第二次世界大戦時代の経験を話し始めました。

これらの二つのグループと交流できたのは、たいへん光栄なことで、私の平和構築への取り組みに力を貸してくださった、ケントさん、サラさんや、WFCの皆様へ感謝致します。これらの最近の2つのプレゼンテーションについて知っていただくことが、皆様や、理事会を励まし、勇気を与えてくれることを、希望します。では、また。メアリー」

次に、私たちが、メアリーに送った返事の抜粋を、ご紹介します。「素晴らしい、有益なEメールを、ありがとう。あなたが学び、世界について見学した内容を他の人達に伝えるのは、時間がかかり、エネルギーを要する事です。けれども、平和を求める旅の途中で一人ではないと分かり、メアリーと話しをする機会があれば、何か手がかりが得られるかもしれない。

私たちは、今、9月に行われる韓国PAX2008を計画しています。修道大学の学生達や、ワールド・フレンドシップ・センターの代表者達や、長崎からの2人の参加者を含め、全員で8名の構成です。中国での、中国、日本、韓国の子供達のための新しいピースキャンプは、不運にも、地震の為に中止になりましたが、私達は、プログラム費用の一部を中国の地震と、ミャンマーのサイクロン救済にあてました。すべて、WFCとしては、初めての事です。」

私達が「友愛」のレイアウトを終えようとする頃、メアリー・コックスから、もう1通のEメールが届きました。メアリーのメールです。

「こんにちは、ケントさん、サラさん。お二人や、WFCの皆様が以下の事にご興味を持たれると思います。私は、広島平和文化センター主催の、被爆者の方のマンチェスター大学訪問と、展示のお手伝いをしています。2008年10月10日に、シカゴから来られる松岡さんがキャンパスでお話され、10月27日から12月1日まで、マンチェスター大学に関連したギャラリーで、原爆ポスター展が開催されます。WFCのご協力に感謝致します。皆様は、これらの特別なイベントに関係ないと思われるかも知れませんが、私の広島と長崎訪問の記憶と経験は、強く、また、私に、反核運動への動機を与えてくれました。どうぞお元気で、メアリーより」

そして、これがアメリカからの2007年度PAXメンバーの一人、メアリー・コックスからの、最新のEメールです。

「ケントさん、サラさん。私は、平和市長会議2020に、市長さん達が加盟するように働きかけてきましたが、私の故郷ココモ市の市長が、今日、その登録書類にサインしてくれました。大変嬉しいことで、皆様にお知らせしたかったのです。それは、今年の4月、ジュネーブでのNPT核不拡散条約の予備大会で始められた、2020年までに世界中の核兵器を廃絶しようという提案です。これは、広島市長、秋葉忠利と、現在世界中の2,400の平和市長会議加盟都市の市長さん達のビジョンです。そして、今、ここに、インディアナ州ココモ市が加わりました。」

ありがとうメアリー。WFCから。

韓国 PAX 派遣団が、出発する 9 月 18 日の前日の夕方、壮行会が WFC で開かれました。PAX の参加者は、1 週間後に無事に、たくさんの土産話を持って広島と長崎のそれぞれの自宅に帰国しました。次の韓国から日本へ来る PAX の計画についての発案が既に“波紋”のように広がっています。以下は 2008 年度 PAX 参加者の報告の抜粋です。

ジム・ロナルド

それは単なる歴史の問題ではない。男性による女性への虐待の記録である—自分もまた男性なのだ。ソンデムン監獄博物館を訪れて、始めは単に日本人による朝鮮人への残酷でサディスティックな行為の苦痛を見せつける展示（自分とは無関係の）、と見ていた。しかし私は気分が悪くなり、それから恥ずかしくてならなくなった。加害者が日本人で被害者はその兄弟姉妹である朝鮮人であったこともあるが、そこに記録され我々が目にしている拷問や残虐行為は人が人に対してやっていること、人間が互いにやっていることに他ならないからでもあった。



〔写真：DMZ（非武装地帯）の自由の橋で（千鶴子、ジム、和枝、寿子）〕

田丸和枝

DMZ 内では、とても警備が厳重で今まで日本では味わったことのない緊張感でした。板門店の側に、北朝鮮との国境とされる小さな段差がありました。ただの平凡な段差なのにこの段差の持つ意味の重さに不思議な思いでした。

韓国では日本側がしてきたひどいことを、実際に見てきました。ナムムの家に行っても、西大門刑務所に行っても、日本軍の行為に対して怒りと悲しみがこみあげてきました。

〔写真：DMZ の会議場（寿子、和枝）〕



李順姫

韓国 PAX に参加したことは、自分自身と向き合う良い機会を与えてくれました。

私は西大門刑務所歴史館に行きました。そこでは、日本の植民地下で 3・1 独立万歳運動を起こした人々の勇気にとても驚かされました。たくさんの韓国人が自分たちの民族と国のために不正と戦おうとしたために刑務所に入れられ、ひどい拷問を受け、命を奪われなければならなかったのかを考えると、悲しくてなりません。残忍な歴史と向き合うことは、つらいことですが、私は私自身のためだけでなく、自分の命を正義のためにささげた韓国人のためにも、日本と韓国との歴史的事実を知らなくてはいけないと思うようになりました。

もし、もっと多くの人々が平和を願い、一歩ずつでも平和のために何かをすれば、この世界に起こっている紛争やテロはなくなると信じています。

植田祥

2008 年 PAX で、朝鮮半島の北と南を分けているラインである非武装地帯 (The Demilitarized Zone) を訪れた。この地は、1953 年の朝鮮戦争の停戦から 55 年経った今でも北と南を神経質な空気とともに分け隔てていた。今回、一番私の中の考えが変わったのは朝鮮併合に対する韓国人たちの意見であった。Korean PAX に参加するまでは、ずっと朝鮮併合は一生不可能であると考えていた。しかし、ホームスティ先の家族、KAC のメンバ



ーとの会話、自由行動の買い物の際に知り合ったお店の店主。彼らは、朝鮮併合を望んでいた。併合を望む一人に、「韓国に北朝鮮を受け止められる力はあると思うのか？」と質問してみた。彼女から返ってきた答えは、「今すぐは無理だと思う。しかし、韓国はその準備を進めている。前よりは可能になってきたと感じている。」と。これから自分が発信する立場になった時には、きっと彼らとの会話を思い出すだろう。そして、私は、自分が考えたこと、彼らの考え、これからの日韓、アジアのことを問題定義していかなくてはいけない。

【写真：ナムムの家 (韓国 PAX メンバー 8 名, Chun Hwi Han, Yoon-Seo, Kyung Jung Kim, 村山一兵)】

河野寿子

日本軍慰安婦歴史館を訪れ、過去の日本軍の非情な歴史に目を覆いたい気持ちであった。戦場に送られる男達の相手をするために現地の女性たちを慰安婦として働かせたのだ。私はこの歴史館に世界中の戦地で同じように行われてきた状況も併せて展示していただきたい。その悲惨な事実を多くの人たちが知れば、戦争は絶対に許さないという意識を持つことにつながるのではないかと思う。不幸な過去の歴史を知り、これから二度と戦争を繰り返さないよう努力することが、不幸な過去を貴重な財産に変えることになると信じます。



【写真：ナムムの家（亜耶、千鶴子、順姫、和枝、Chun Hwi Han-韓国人慰安婦のかた、寿子）】

関口良雄

『「従軍慰安婦」というのは、間違っています。彼女たちは、日本兵たちのために、女性と言う人格を、踏みにじられた被害者で、陵辱された被害者です。』若い日本人ボランティア青年の言葉が、私の胸を突いた。なぜ彼女たちが、そんな酷い目に遭ったのだらうか。日本兵たちにも、母や妻や姉妹が日本にいたらうに。私は犠牲になられたハルモニの方々に、歴史的責任の観点から、深く心からお詫びします。私に出来る事は、若人達や、こうした問題に関心のない人たちに、国家体制が、如何に我々の生活と、世界の人々の命を護るか、または滅ぼすかに、大きく関係するかを、考えるよう説得する事です。



【写真：ジム、Seo Jung Ki (ホスト)、関口先生】

田口千鶴子

Korea Anabaptist Center が9月18日から23日まで、2008 WFC 韓国 PAX 8人を受け入れて下さった。KACは、建物ではなく、規模はやや小さくても、世界を動かす程の活動に従事する人々の、平和作りの集団、あるいはネットワークであった。【写真：Grace & Peace Shuch 日曜礼拝の教会メンバーたち】



その活動は、英会話授業をベースに、平和教育、平和活動家の育成、本の出版、インターンシップ、平和使節交換、各種調停プログラム、Women Making Peace など、多種に渡っていた。出会った方は若者がほとんどで、皆はつらつとされていたのが印象的だった。

今回、KAC から、“Northeast Asia Region Peace Building ”プロジェクトへの参加を提案された。若者を巻き込みつつ、アジアの歴史を学び、交流を深める事は、相互理解と平和作りに大きく役立つと思う。また、以前ホームステイを受けた方々に再会でき、生きている喜びを味わった。

小野亜耶

そのような歴史をもつアジアの方々にとってみれば、原爆投下はどんなに惨いことだったとしても必要だった・・・そう思っている人がいるということは知っていましたが、韓国を訪問する前までは、何故原爆資料館を訪れたにもかかわらず、わかってくれないのか。そう思うだけで理解に苦しんでいたものの、実際日本が行った加害について勉強してからは、被爆3世である私は原爆を許せないですが、彼らの気持ちも理解することができました。そう思うってしまうくらい、日本がアジアに対して行ったことは酷かったからです。しかし、そう思っている人たちも核兵器については反対だという人が多く、核の恐ろしさを知ってもらえていることが嬉しかったです。



[写真：西大門刑務所 PAX メンバー 8 名、Jae Young Lee, Chai An Jin (千鶴子と亜耶のホスト)、Seo Jung Ki (ジムと関口先生のホスト)、Jeon Sung Gyul (寿子と順姫のホスト)、Lee Hyung Gon (Jae Young のお父さん)]

1958年、バーバラ・レイノルズと家族は、フェニックス号で、核実験のために航海禁止区域となっていた海域に乗り入れました。彼女の行動と証言は波紋を起し、新聞の見出しを飾り、平和を希求する世界中の人々に勇気を与えました。あなたは自分や他の人の生活の中に、まだその“波紋”を感じることができますか。



写真：韓国 DMZ の自由の橋

WFC のボランティア達はその“波紋”を感じることができます。英語クラスの生徒、理事、インターンそしてそのほかの人達もそうです。ケントとサラが、娘エリカの結婚式に出席するためにウィスコンシンへ行っていたときに、WFC のボランティアは、世界中から宿泊客を泊まらせるために、センターに来て、ゲストの受け入れ、世話などしました。その10日間、ボランティアは力をあわせ多くのことを学びました。ケントとサラがいない間、また帰ってきた後も、たくさんの改善がなされました。

神田高明氏は「WFC 夜勤」という題の文の中でそのときの経験について述べています。

【写真：スウェーデンからのゲスト Lindenberg 一家、哲之さんと白男川さん】

サラとケントさんが2週間アメリカに帰られたので、夜勤当番を3夜ひきうけました。



夜勤についてはサラとケントから何をしたらよいかということをつつかり教わっていましたが、分かりにくい英語の人が来たりして困るのではないかと心配しました。しかし勤めはとても楽しかったのです。

心配は無用でした、世界のいろんな国からの人たちと会えて楽しかった；最初の晩、6月12日にはフィンランドの女性とフランス人男性、それから翌朝はオーストラリア人カップルにも会いました。

2回目、16日にはハワイからの10名のゲスト、8人の生徒と先生2人、彼らはその日マツダ・ミュージアムを訪問したのです、そして次の日は夜市民球場でカープの野球を見るということでした。

19日が3回目でしたが、10名の客があったのです、朝食は7時45分からと8時半からのと2つのグループに分かれるのですが、遅いほうのグループの中に都合があつて何とか早くできないかという方がおられたのです、それで朝食番の美穂さん、千鶴子さんにこれを伝えたのですが、お二人はなんとかこれに応じるため、事務室にテーブルを運びいれて臨時の食堂として朝食をだされたのでした、お客は床の上に座らなくてはいけなかったのですけれども・・・。お客さまを満足させようとなさるお二人の親切に感心しました。火曜夕のクラスからは白男川さんが14日奥様と、岡原さん吉武さんが2晩の夜勤をされました。

WFCは町中の騒がしい場所にあつて狭苦しい家でしたから夜は眠れなかった。それでサラさん、ケントさん（さらには歴代の館長さんたち）がこの中で忙しく暮らされておられることに大いなる敬意と感謝の気持ちを抱きました。

また大勢の方がそれぞれの役目をしっかりと果たされたことにもとても感心しました。ともあれ、とてもいい経験となりました、いろいろな国の方々とさまざまな話ができたこともとても楽しかったです。ありがとうございました。

40年前、バーバラ・レイノルズは「世界中からの旅行者が広島で集い、広島の人たちと意見や考えを交換する機会を持つ」というビジョンを持っていました。みなさんは、広島で同じ経験を共有しているゲストやボランティアの生活を通して、今もその波紋の広がりを感ずることができるでしょうか。